

## ベトナムにおける英語授業観察

### English Class Observation in Vietnam

Keiko Yoshida\*\*      Gerald Williams\*  
Jonathan Aliponga\*      Hector Luk\*\*

#### 抄 録

ここ数年、日本を含めアジア諸国の政府は、学校の英語教育において、教員・文法中心の授業から学生・会話中心の授業に移行させる方針を打ち出しているが、実際その方針通りには授業が進んでいないというのが現状である。

そのことをふまえ、著者は2007年夏にベトナムの小・中学校や大学の英語授業観察と教員へのインタビューを実施し、どのような指導法が実践されているか、また教員が自分の授業をどのように感じているかを調査した。

その結果、小学校ではcommunicativeであった学生や指導法が、中学校の文法中心の授業で、徐々にその特徴が弱まっていることがわかった。また早期英語教育を受けておらず、英語を使用する機会が少ない現在の大学生は、発音の学習に苦勞しており、教員もcommunicativeなアクティビティの必要性を実感し、授業内で様々な工夫していることがわかった。教員間で授業を観察し合い、また相談し合えるネットワーク作りが必要であることを実感した。

#### 1. はじめに

2007年10月、ベトナムは国連総会で190票中183票の支持を得て、安全保障理事会の非常任理事国に選出された。国際社会での発言力を強めると同時に、ベトナム国内ではここ数年英語学習熱が高まっている。2003年には、ベトナム教育訓練省が新カリキュラムを導入し、小学校3年生から英語教育を開始し、2015年までを見据えてAction Planという教育目標を作成しており、学習者のcommunicative abilityの向上を目指している。この点でベトナムと日本の英語教育の目指すところは一致しているといえるだろう。

また学外の英語学習についても、かつて主流であった公立大学附属の英語学校以外にも、外資系の英会話学校などが次々に参入し、学習者の人気を得ている。2005年タイの高等教育委員会が発表した英語試験のひとつであるTOEFLの国別平均点において、ベトナムは東南アジア9カ国中6位であった。5位までの国々は順に、シンガポール、フィリピン、マレーシア、インドネシア、ミャンマーであり、英語を公用語としている2国が1, 2位を占めている。ベトナムの後には、ラオス、タイ、カンボジアが続く。

---

\* 関西国際大学教育学部

\*\* 非常勤講師

関西国際大学でも、数年前からアジア諸国の英語教育に目を向け、アジアの英語教員が相互に学び、お互いの国における英語教育の質の向上を目指したネットワーク作りを行ってきた。その一つが、2005年、2006年にベトナム社会人文科学大学（以下USSH；ホーチミン市）で行った、現地の英語教員向けの英語教育セミナーである。セミナーでは、授業におけるdialogue, short writing task, peer-editingの効果的な使用法や、英語・ベトナム語の音声比較に基づいた、適切な英語音声指導法の紹介などを行った。

今回のベトナムにおける授業観察では特にカナダで開発された授業観察スキームを用い、実際の授業観察を通してベトナムの英語教育の現状をより細かく調査した。特に授業でcommunicative approachが行われているかを調べ、教員の意識や、教員が授業内で行うアクティビティの選択・実践方法にも焦点をあてた。

本研究グループは今後さらに日本やタイでも同様の授業観察を行い、それらの結果を比較したうえで、アジア圏の英語教育の充実を図り、教員間のネットワーク構築にも貢献することを目標としている。また日本で開始される予定の小学校英語教育にも活用できる指導法を発見し、小学校英語教育に携わる教員間においても、授業相互観察を通して、指導力の向上が図れるようなネットワーク作りを促進していく予定である。

## 2. ベトナムの英語授業観察の独自性と目的

本研究では、同じアジア圏内で英語を第2言語として学ぶ学習者が多いベトナムを訪れ、現地の様々な学校の英語授業を実際に観察し、より詳細にアジアの英語教育の現状を調査した。本研究の独自性は主に以下の2点である。

(1) カナダで開発された授業観察スキーム（Communicative Orientation of Teaching Language: 以下COLT）を使用し、アジア諸国（ベトナム・タイ・日本）の教員が授業で使用するアクティビティの内容やその実践方法、教材について調査する。

(2) 小学校から大学、また民間の英会話学校など、広範囲の英語教育現場を見ることで、ベトナムの総合的な英語教育を把握する。

(1) に関しては、アジア各国において教員間で授業相互観察手法の知識を広め、さらに観察が行いやすい雰囲気やネットワーク作りに貢献することがねらいである。また、アジアで使用されている教材を調べ、アジアの生活や文化により適応した今後の教材作成に活かすことも目標の一つである。

(2) に関しては、ベトナムでは2002年以前は小学校1年生から選択科目として英語教育が行われており、2002年度以降は小学校3年生からやはり選択科目として英語が教えられている。今回は私立ではあるが、実際に小学校を訪れ、どのような教材を用いて、どのように授業が進められているかを調査し、今後日本で始まる予定の小学校英語教育において役立つアクティビティや指導法を発見し、日本の教員にも周知することを目標としている。

### 3. 授業観察手法

#### 観察対象授業

私立小学校1校（NGO THOI NHIEM：ホーチミン市）、私立中学校2校（NGO THOI NHIEM：ホーチミン市、ビンタン地区）、大学3校（USSH, VTTH：ホーチミン市；Binh Duong Teachers College：ビンドゥン市）、民間英会話学校1校（SIT：ビンドゥン市）を訪れ、授業観察を行った。

#### 機材

ビデオカメラ、ビデオテープ、三脚、延長コード、COLT観察記録シート、教員へのアンケート、ストップウォッチ（または時計）、ノート

#### 手順

担当教員に10分程度のpre-lesson interviewを行い、教員の目指す授業やこれから行う授業についての考えを聞く。授業中は教室の後ろに座り、ビデオカメラで授業の様子を撮影しながら、アクティビティの詳細をCOLT観察記録シートやノートに記録する。授業後にpost-lesson interviewを行い、終了したばかりの授業についての教員自身の感想や考えを聞く。どの学校でも教員は非常に忙しいため、interviewの時間が限られている場合もある。そういった場合のためにアンケートを用意し、授業後教員に手渡し、回答したものを後日直接またはe-mailで受け取ることができるように手配し、回収した。

#### COLT

ここで、今回の授業観察で使用したスキームである、COLTについて詳しく述べてみたい。まずは、開発に至る背景を見てみよう。COLTは1980年代にカナダで開発された授業観察スキームである（Allen, Frohlich and Spada, 1984）。当時オンタリオではフランス語のcore French classes（フランス語の授業）、extended French classes（フランス語を使用して、ある1つの科目を指導する授業）、French immersion program（フランス語を使用して全科目を指導するプログラム）や、英語のintensive programなど、様々な形態で第2言語教育が行われていた。そこで、第2言語の熟達とは何を意味するのか、また授業内のどのようなアクティビティや取り組みが、その熟達度の向上につながるのかを調査する大規模な研究プロジェクト、the Development of Bilingual Proficiency (DBP)が実施された。実際にそのプロジェクトには、1) communicative competenceとは何か、2) communicative competenceの向上に及ぼす社会的環境の影響、3) 第2言語学習に効果を及ぼす指導法、4) 個々の学習者の性格が学習に及ぼす影響、の4点を明らかにする目標があった。中でもDBPが最も焦点を当てていたのは、3)の指導法とcommunicative competenceの向上との関係であったため、各授業において用いられる指導法を授業観察を通して調査・分析することが必要不可欠となった（Spada and Frohlich, 1995）。

次にCOLTの開発の目的について触れてみよう。1970年代から、1980年代にかけては、授業観察スキームが約25も誕生したと言われている。それぞれのスキームが異なる焦点をもっている中で、COLTは

上記のような背景から、第2言語教育におけるcommunicative approachとその効果の調査（process-product research）に使用されることを目的として開発された。特に重要なのは、COLTは心理言語学的に妥当なカテゴリーを持ち、指導内容と効果の関係に関する仮説の検証に使用可能になったことである。

では、その心理言語学的に妥当なカテゴリーとはどういうものだろうか。COLTは2部構成になっている。それぞれのPartには、第1言語獲得や第2言語習得の理論を基にCOLT開発者が考案したカテゴリーが含まれている。例えば、Part Aは Time, Activities and Episodes, Participant Organization (class, pair /group, or individual), Content, Content Control, Student Modality, Materialsというカテゴリーで構成されている。このようにPart Aは、授業内で行われるアクティビティの内容や形態、学生が使用するmodality、教材など、教員の指導方法の記録・分析に重点が置かれている。一方Part Bは、さらにTeacher Verbal InteractionとStudent Verbal Interactionに分かれており、教員と学生との口頭でのやりとりに見られる特徴（各自の発話継続時間や、言語形式/メッセージ内容に対する直接的な指導の有無など）の記録・分析に重点が置かれている。

COLTの開発者は、communicativeな指導は、言語形式よりもメッセージ内容に目を向けた指導であり、クラス全体がコーラスのように答える形態よりも、group workなどの自然な会話形態を用いたアクティビティであると考えた。また学生への質問の内容についても、第1言語獲得の場面で見られるように、genuine question（真の質問：教員が答えを本当に知りたくて尋ねる、答えの予想が不可能な質問）が、よりcommunicative competenceの向上につながると考えている。そのため、以上のようなカテゴリーを設け、授業内でそういったcommunicative approachが実践されているかを測るスキームを開発したのである。

では、実際にこのCOLTはどのように使用され、それによって何が明らかになってきたのだろうか。COLTの開発者の一人であるNina Spadaは1987年にCOLTを使用して、成人向けの中級レベルの英語クラス、A、B、Cの指導内容とその効果について分析を行った。いずれのクラスもメッセージ内容に重点を置いていたものの、クラスAでは言語形式に関する指導が他のクラスよりも多くみられ、クラスB、Cでは文の機能などに関する指導が主に行われていた。また、通常授業でのリスニング内容理解問題の実践方法が3クラスで大きく異なっていた。クラスB、Cはpre-listening activitiesに十分時間が費やし、文章のリスニングの最中にも学生にわからないことは質問させるようにしていた。クラスAでは、内容理解の問題が書かれた用紙を配布し、学生に読ませた上で、2回リスニング文章を流す指導を行っていた。その結果、クラスAでは文法筆記問題で成績がやや他の2クラスを上まわる傾向（有意差なし）が見られ、クラスB、Cは、リスニングでクラスAよりよい成績を残した（有意差あり）。また、その2クラスは発話課題においてもより正確に解答する傾向が見られた。

このように、COLTを使用することにより実際の指導内容とその効果をみることも、可能になる。著者の研究では、現段階で観察を行った授業数がまだ十分ではなく、はっきりとした効果を示すことよりも、COLTの使用を通して教員自ら授業改善の意識を高めるヒントやきっかけを作ることが重要であると考えするため、Spadaのような分析は今のところ行っていない。COLTの最も重要な役割は、教員が授業観察を通して、お互いに学び合い、教員が自分の行っている授業の特徴や良い点、問題点に気づき、新たな

アクティビティを他の教員から学び、普段の授業ではしていないアクティビティにあえて挑戦することを奨励することである。

#### 教員へのアンケート

pre-lesson interview questionsとして、まず教員の学歴・職歴、現在の担当授業数や勤務時間などについて、回答できる質問のみ、任意で回答してもらった。また、以下の授業内容に関する質問も設け、回答してもらった。

1. What do you try to do in your teaching in general?
2. What are the obstacles/problems in trying to achieve that goal(s)?
3. What do you do to solve those problems?
4. What is your teaching philosophy?
5. Why did you decide to go to graduate school? (if applicable)
6. What is your ideal language class?
7. What do you expect from students in class? after class?
8. How do you assess/evaluate your students?
9. Do you give homework? What kind?
10. What kind of materials do you use?

\_\_\_\_\_ Textbook      \_\_\_\_\_ written by native speaker  
                                 \_\_\_\_\_ written by Vietnamese  
\_\_\_\_\_ Teacher made  
\_\_\_\_\_ Student made

#### 授業観察の際の留意点

授業観察を行う目的は、教員の授業、アクティビティ、指導法を評価することではなく、教員自身が普段頭で考えている授業と実際の授業との差違に気づいたり、普段はあまり使わない指導法や、新しいアクティビティに目を向ける機会を提供することである。また、他の教員の授業を自由に観察できる環境を整える手伝いをするすることである。よって、そのことを十分事前に伝え、なるべく教員や学生が通常どおりに授業ができるように、観察者は配慮する。そのために、教室に前もって入れる場合は、許可を得て早めに入り、観察者は学生とも会話するなどして、自然に授業が開始されるように努めることも有効である。ビデオ撮影よりも音声のみのテープ録音にとどめておく必要がある場合は、そのようにする。今回はすべての教員より許可をいただき、ビデオテープに授業風景を撮影することができた。やはりビデオテープに画像・音声とも記録を残す方が、授業の内容を後で確認しやすいと考える。

#### 4. 授業観察からわかったこと

##### 教員の英語使用

教員の英語の使用であるが、全体的に英語を使用しての指導が非常に多かった。学年別に見ると、小学校2、5年生のクラスでところどころゲームの説明時にベトナム語を使用したことがあったが、ほとんど目標言語である英語で授業が行われていた。かえって中学校の授業の方が、文法などの説明の際にベトナム語を使用する場合が多くあったが、教員や担当クラス、指導内容によって英語の使用が異なると思われる。大学の授業は、Yoshidaが観察したクラスでは、初級・上級の両方で完全に英語で授業が行われていた。上級クラスの教員は、アメリカンスクールで昼間教鞭をとっており、かなり流暢な英語で高度なリーディングの授業をcommunicativeに教えていた。

### 学生の英語使用

今回の授業観察で最も驚いたことのひとつが、小学生の英語のcommunicative competenceである。教員の指示や質問をかなり英語で理解し、発音は教員よりもむしろ自然である場合があった。明らかに英語母語話者の発音を、以前もしくは現在聴き真似る経験をしているとわかる程度であった。小学校自体に英語を母語とする教員が2名いたことや、就学前に英語学習を経験している子供たちも含まれている可能性があることが原因かもしれない。早期英語学習の利点が現れていると感じた。

高学年になるほど学生による英語の積極的な発言は少なくなり、ベトナム語の影響を受けたと思われる英語の発音が多く聞かれた。大学生の夜間クラスは、地方からの学生も多く、読み書きや文法の能力が非常に高い学生であっても、英語で会話をした経験のある人が少ないということが、学生や先生と話す中で判明した。小学校までのcommunicative approachをいかに中学校における英語授業につなげていくかが今後のポイントであろうと考える。これは、日本の小学校英語教育と中学校英語教育の連携において将来起こることが予想されている問題である。

そこで、この問題に対して会話に興味のある学生たちがどのように対処しているか垣間見ることができたので、その一例を紹介する。それに気づいたのは、土曜日に民間の英会話学校を訪れた時であった。土日は、朝7時から公立の学校の教室の一部が民間の英会話学校に解放されている。そこであらゆる年齢層の英語学習者が朝7時から11時までcommunicativeな英会話の授業を受け、お昼には一度帰宅して食事をしたりシャワーを浴びた後、午後3時から夕方遅くまで授業を受けるのである。中学生もたくさん授業に参加して、ここぞとばかり英語を使って会話をしていた。仮に学校の授業内でもっとcommunicativeな能力が伸ばせていたら、土日に英会話学校に通う必要が無くなるかもしれないとも思われた。

### Communicative approach

今回の授業観察で見られたcommunicative approachのいくつかを個々であげてみたい。まず小学校5年生の授業でみられた学生によるteacher roleの役割である。Flash cardを先生役の学生が手にしながら、食べ物やその数を別の複数の学生に尋ねて歩くアクティビティである。次に大学の授業では、daily routineをクラス内の4人にinterviewするアクティビティなどがあった。また同じく大学のリーディングの授業で、仕送りが無くなったら、まず何を考え、どう行動するかなどを尋ねる、genuine questionを使用したアクティビティなども行われ、より自然な会話の状況が見られた。しかし、学生同士が尋ね合う形式ではなく、教員の質問に指名されたり、挙手した学生が一人ずつ答えるという形式であることが

多かった。授業観察があったせいか、学生側からの質問やtopicの選択ではなく、教員対クラス全体という会話形態が主流で、学生の発話機会が多くない現状がわかった。

## 教材

2003年から公立の小学校で3年生から英語の授業が(基本的には選択制で都市部でのみ必須扱い)始まり、教科書は教育訓練省指定のTIENG ANHを使用することになっている。私立の小・中学校でもこのシリーズを使用することが原則的に義務付けられている。しかし公立小学校用テキストは3年生以上が対象であるためか、私立小学校2年生の授業ではOxfordのLet's Goシリーズを使用していた。5年生の授業でも同じシリーズを使用していた。

中学校で使用される教材は、同じく教育訓練省指定のTIEN ANHで、トピックは学校だけでなく、地域、世界、環境にも触れている。大学での教材は、基礎レベルの授業では、教員が独自に作成したinterview sheetなどを使用しており、上級レベルの授業では、1920年代が舞台となる文学作品の一部を抜粋し、設問を付与した問題集を使用していた。教材に登場する語彙の多くは非常に古く、文学的であり、日常生活で使用するものではなかった。

## 5. 教員へのアンケートからわかったこと

### 教員の指導方針

小学校の教員は、できるだけ授業で楽しい雰囲気を作り、学生が楽しんで英語を学習したり、英語を使って遊ぶことができるよう、新しい手法を積極的に取り入れながら授業を行うよう努めていると回答している。中学校の教員は、文法と英語の使い方を理解させることに重点を置いた指導をしていると回答した。大学の教員はリスニング・スピーキング・リーディング・ライティングの総合的なスキルアップを目指し、特に基礎レベルの授業では、発音の指導に力を入れていることがわかった。また、大学の教員は、教員が自分の学習経験を学生に伝え、学生が工夫しながら、独自の学習スタイルを見つけ出すように導くのが教員の役割であるとも回答している。

### 教員の考える理想の授業

理想の授業を尋ねると、授業環境や学生について回答する例が非常に多かった。例えば、1クラスの人数が20人前後であること。十分な設備や教材が整っていること。学生がほぼ同じ学習経験や知識を持ち、レベルが均一であること。英語を第2言語として全員が使用できること。このように、理想の授業という質問に対し、教員の授業内活動についての回答があると予想していたが、ほとんどなかった。おそらく日常の授業で、教員自身は理想の授業を目指し最大限の努力を重ねているという実感があるため、このような回答になったのではないと思われる。質問の仕方を変える必要があるかもしれない。

### 教員が感じている問題点とその解決法

問題点として、学生が受動的で、英語を使うことを恐れたり、恥ずかしがっていることを挙げている回答が多かった。特に中学校の教員がそのように回答している。またベトナム語と英語の発音の違いが

大きく、指導が難しいという回答もあった。解決法としては、授業内で学生が話す機会を多く含んだアクティビティを行うことで、母語話者の発音以外にも様々な発音が容認されうることを学ばせ、学生に自信をつけさせるという意見や、仲間の教員に相談するという回答がいくつか見られた。

また、小学校の教員は学生が騒ぐこともあるため、新しい教授法をインターネットで調べ、試しながら、学生の興味をひく努力をしていると回答している。大学の教員は、現在の大学生は早期英語教育を受けていないため、英語の語末子音を発音しない傾向が強く、外国人とも触れる機会が少ないことが問題であるとしている。そのため、授業中に1) 教員の口を見ながら発音を真似る練習、2) テープに録音された母語話者の発話をリピートする練習、3) スピーキング・アクティビティ、の3つの具体的な訓練法を使用して、学生の発音への自信を高めていると回答している例もあった。

### 学生に期待すること

教員は一律に、学生に英語をもっと好きになって、積極的に、創造的に使って欲しいと回答している。自分の考えを他の学生に発表することをためらわず、自信をもって欲しいとも回答している。この回答から、教員は学生の積極的なcommunicative interactionが増やせる余地がまだまだあると考えていることがわかる。学生の積極的な英語の使用を促すような、効果的なアクティビティの選択や実践が教員側にも必要だともいえるだろう。

### 評価法

宿題、課題、試験、授業内の努力が評価基準として挙げられている。また小学校の授業では、出席と教員の指導を熱心に聞いていたかで評価が決まるという回答もあった。

### その他

教員は小・中学校で45分授業を一日4コマ以上担当している場合がほとんどで、週4日の勤務が多く、なかには週6日勤務の教員もいた。民間の英会話学校では週6・7日勤務の場合もあった。もっと教材の作成に費やす時間が欲しいとinterview時に語った先生も多く、英会話学校では、教材選択の自由がある分、学生のレベルに合った教材選びが難しいと述べた教員もいた。学生のレベルに合わせ、教員が共同で教材を作成したり、できた教材を共有しているようであった。

驚いたことに、普段の授業では英語で指導する小・中学校の教員でも、直接インタビューをすると、英語での会話に慣れていないのか、やや英語を使うことをためらっている様子もうかがえた。私立小・中学校の教員でもこのような状況が見られたので、公立小学校の教員の不安・緊張も大きいのではないかと考えた。これから始まる日本の小学校英語教育の現場でも教員の不安を取り除く必要があるのではないかと感じた。そのためにも、日頃から研修や教員間の相互授業観察を積極的に行い、指導法の向上などについて相互に相談できるネットワーク作りの必要性があると認識を新たにした。

## 6. 今後の課題

今後は日本とタイにおいて同様の授業観察と教員へのインタビューを行い、1) communicative approach

やstudent centerednessが達成されている程度, 2) 教員の目指す授業と実際の授業に関する教員自身の認識, 3) 教員の抱える問題, を検証し, 3カ国間で結果を比較する。その3点をふまえ, 教員間の相互授業観察システムを奨励し, 自分や仲間の教員の授業を観察することで, 各自が指導法の改善・向上の必要性や方法を見つけられるように促す。そのために, 今回使用したCOLT授業観察スキームの使用法に関するワークショップを現在も行っているが, 引き続きアジア各国でも実施する。また指導法や問題についての意見交換が行える教員間のネットワークや研修が必要であることを周知し, 実際にアジア各地で授業観察法の研修を行うことを通して, ネットワーク構築にも貢献する。

さらに, 今回適切な教材を選ぶことの難しさに悩む教員もいたため, アジアにおける3カ国, 日本・ベトナム・タイの英語教員がそれぞれの文化に根ざした各学校・授業独自の英語教材の開発・使用が可能となる方法を考える。広く日本国内外の学校の英語教員に教材開発に関する理論と方法を指導することも目標とする。具体的には1. 教材開発に必要な知識と技術を持つ英語教員の育成 2. 教材のテキスト化 3. 新しい教員への教材開発・使用方法についての研修, を実施していく計画である。

## 参考文献

- Allen, P., Frohlich, M. and Spada, N. 1984. The communicative orientation of language teaching: An observation scheme. In J. Handcombe, R.A. Orem and G.Taylor (eds). On TESOL; '83: The Question of Control. Alexandria, Virginia: Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc.
- Spada, N. and Frohlich. 1995. COLT: Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme: Coding Conventions and Applications. Sydney: National Centre for English Language Teaching and a Research Macquarie University

## Abstract

Nowadays the governments of Japan and other Asian countries have a common policy of communicative language teaching in foreign language classes at schools. In daily classrooms, however, the policy cannot always be realized.

Based on this reality, the authors conducted English class observations and interviews with teachers at local schools in Vietnam, ranging from primary to college level, in order to discover what activities they employed were really communicative and effective to raise the communicative skills of their students and what they thought about their own classes.

Despite the data limitation, the results revealed the tendency that the communicative competence of the students are somewhat better in primary schools than in later or higher educations. Some teachers and students admitted that college students, especially those who had not received primary English education, were struggling in acquiring proper or intelligible pronunciation and communicative skills of English. Therefore, the teachers were making their best efforts to create and try communicative activities in their classes. The authors assumed that those teachers need networks among them where they can observe classes given by colleague teachers and improve their own teaching approaches in daily classes.